（様式第８号）

事業報告書（令和４年度）

事業名　　トンボの森づくり体験と環境学習（まちなかのふるさと教育の一環の活動）

団体名岡山市立岡山後楽館高等学校まちなかのふるさと教育実行委員会　担当者名柴田美智子

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

１．活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

１.「トンボの森づくり体験と環境学習」

令和４年 10 月 20 日（木）15:50～16:50　岡山後楽館高等学校　1・3 年次生　15 名

岡山後楽館中学校　　2 年生　　1 名参加

「事前指導」　講師　小桐　登　様（一般社団法人　おかやまエコサポーターズ）

・事業内容の説明

・森の機能や役割について（講師作成のプレゼンテーション資料を使用）

・森の整備の必要性について

・化石燃料に頼らない、自然資本を生かした経済の循環や自然の範囲の中で生活する日本人の知恵の伝承や新しいライフスタイルについて

・マイクロプラスチック問題について

事前指導

令和４年 11 月５日（土）8:00～17:00

トンボの森、津黒高原荘など　高等部 1・3 年次生　15 名

中等部 2 年生　　1 名参加

「トンボの森づくり体験と環境学習」

講師　小桐　登　様

川原　洋平　様（服部興業株式会社）

① オリエンテーション

・真庭トンボの森づくり活動の説明（目的、関係団体、活動の経緯、森の変化など）

・森の作業の注意と作業方法の説明、身支度

② 移動、講義、作業

・移動しながら森の整備状況の説明

・森の機能を考える

・森の役割と日本人の暮らしの関わり方の変遷の説明

（かつては、山菜やキノコなどを食物として利用したり、木を伐採して薪として利用したりしていたが、現在は森の中にあるものを使わなくなった。このような生活スタイルの変化が森に与えた影響と今後について）

コナラの伐採

（様式第８号）

③ 森の作業

・コナラの伐採の見学および伐採木の枝払いと玉切り体験

・笹刈り、間伐木の運搬作業

④ 薪割体験および薪ボイラーの見学

講師　赤木　直人　様（一般社団法人　アシタカ）

⑤ 感想、振り返り

伐採木の玉切り

笹刈り

薪割体験

薪ボイラー見学

令和４年 11 月 10 日（木）　15:50～16:50

高等部　1・3 年次生 10 名　　中等部　2 年生 1 名　参加

「事後指導」　講師　小桐　登　様

・体験を通して、気づいたことや学んだことの振り返り

・課題や問題だと感じたこと

・体験によって感じた事をもとに、自分たちに出来ることは何か

以上 3 点についてグループで話し合い、情報を共有

２．岡山市立大元幼稚園「木育教室」

令和４年 10 月 29 日（土）9:00～11:00

3 年次生 9 名参加

・本校高校生が大元幼稚園へ出向き、園児に木育を実施

・保育園児が岡山県産木材（ヒノキ材）を使って木の車を作成する際の補助、および事前準備

木育教室

作成された木の車

（様式第８号）

３．岡山県産木材ふれあい事業

「未来へつなぐ森林体験実行委員会」の協力により提供された岡山県産木材（ヒノキ）の間伐材を使って、生徒が「木工作品」を製作することにより、木材に慣れ親しむことができる。さらに、製作したベンチや木工製品を近隣の幼稚園や小学校や地域の施設などに提供することで、子供たちや地域の方々も県産材と触れ合うことができる。この取組をすることで、県産ヒノキ材利用促進にもつながる。

制作した作品（ミニキッチン）

製作した作品（紙芝居台）

２．ESD の視点

①事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

・山川里海のつながりをしっかり理解した生徒が、西川の清掃活動以外に西川の環境保全活動の１つとして「西川水族館」（今年度も校内のみで実施）を実施し、ＳＤＧｓの視点を取り入れて川や海の環境を守ることの大切さをこれからも多くの人に伝えていく。

・参加者は森の保全のためには人の手が必要で、非常に危険を伴う作業であること、林業の担い手が減少していることなどを学び、自分たちが授業で取り組んでいるヒノキの間伐材を利用した「岡山県産木材ふれあい事業」の意義を理解し、使う人のことを考えて作品の製作に積極的に取り組むことができた。

②どのように学び合いを取り入れたか

・「トンボの森づくり体験と環境学習」を岡山後楽館高等学校の「まちなかのふるさと教育」の一貫の活動として位置付けることで、年１回だけ実施する活動ではなく、継続実施している西川や瀬戸内海（今年度未実施）での活動と連動することで、山川里海のつながりを学び持続可能な地域づくりに貢献できる生徒を育てる取組にした。また、中等部とも連携し６年一貫教育を見通した活動とした。

・建築デザイン系列の「岡山県産木材ふれあい事業」、「木育教室」と連携した取組を行った。

③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

（様式第８号）

・建築デザイン系列の生徒が積極的に「トンボの森づくり体験と環境学習」に参加することにより、自分たちが授業の中で取り組んでいる「岡山県産木材ふれあい事業」の意義を理解する。
・事後指導のワークショップで、付箋を用いたＫＪ法によりグループごとに活動のまとめを行い活動内容の振り返りを行い、環境についての学びを深めることができた。
・実際に間伐材を利用して作品を作り、近隣の小学校や幼稚園などに寄贈することで、自ら達成感を感じ、寄贈先の児童や園児には子どもの頃から木材に触れ親しむ機会を提供し木の良さを伝えることができる。
・「トンボの森づくりと環境学習」や「岡山県産木材ふれあい事業」の取組をポスターにまとめ、校内で掲示を行っている。また、「岡山県産木材ふれあい事業」でいただいた感謝状を表彰額にいれて掲示し、生徒の活動に対する気持ちを高めている。

３．取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

・実際に森に入り、街の中との空気感の違いを肌で感じながら、笹刈りやコナラの伐採の様子の見学、伐採木の玉切りを体験して森を整備することの大変さや必要性を感じた生徒が多い。
・建築デザイン系列の生徒が、コナラの伐採の見学や伐採木の玉切りを体験することなどで、以前から行っていた「岡山県産材ふれあい事業」の間伐材の有効利用について改めて意義を感じることができた。
・湧水が出ている場所を見学し、森のはたらきを実感し森の大切さを学ぶことができた。
・さまざまな活動に参加することで、自己肯定感が高まった生徒や、「ふるさと」としての岡山や西川の魅力を発見し、地域活性化や持続可能なまちづくりに関心を強めた生徒が増加した。
・建築デザイン系列の３年次生は使う人の気持ちを考えて、デザイン・設計を自ら行い、オリジナルな木工作品を完成させ、近隣の幼稚園などに寄贈した。また、今年度から行っている「木育教室」でも、子どもの頃から木材に触れ親しむ機会を提供することができた。
・一般社団法人など外部団体と連携して、「トンボの森づくり体験」で新しいプログラムを実施することができた。
・生徒の感想
「森の管理のために木を切ることは大切で、間伐された木を大切に利用したい。」「森を管理する人が不足していたり、地下水に流れ込むため害虫に対する薬品処理が出来なかったりしてナラ枯れなどの木が増加して大変な状態になっていることを知った。」など
・自分たちにできる取組
「森の保全には人の手が必要なので、今回の体験をみんなに知ってもらいたい。」「プラスチック製品ではなく、木の製品を使う。」「海外の木材ではなく国産の木材を使用する。」「積極的にボランティアに参加する」など

４．今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくり

（様式第８号）

の発展・継続につながるか）
・外部団体と連携して山川里海のつながりを知る魅力的な活動プログラムを新たにつくることで、活動に参加する生徒の増加につなげていきたい。 ・同じような取組を行っている学校と交流し、さらに見識を拡大していくとともに活動内容の見直しを行う。 ・建築デザイン系列の生徒が行っている、「木育教室」「岡山県産木材ふれあい事業」を今後も継続する。 ・参加生徒から環境問題について考えるよい活動であるため継続してほしいという意見が多く、今後も「森づくり体験と環境学習」の活動を継続できるよう、生徒負担を軽減するためにも助成金などを申請する。